

第四話<幻の“T. I. A”>

撮影が始まると、とにかく日本人スタッフのなかで（一応主役でありながらも待遇は s t a f f でした）間違いなく一番英語の分からない自分は、身ぶり手ぶりのコミュニケーションだったのもむしろ外国人スタッフともスムーズなコミュニケーションがとれたのだと思う。

…しかし英語の話せるスタッフは、しょっちゅうアメリカ側のスタッフや現地のスタッフとギャラのことや時間のことで揉めているようだった。しかも…アメリカスタイルなのかバミューダスタイルなのかは知らないが、とにかく休憩時間が多いうえに昼からステーキを食べ休み時間の間、昼食の残りのハムやチーズを餌に釣りを楽しむのですが、これがまたカラフルな熱帯魚の入れ食いで、なかには 20 リットルのドラム缶を浮きにして大物を釣るんだ！というスタッフもいて、皆は大いにエンジョイしました。もちろんわたしも…。ところが、日本の撮影班でその仲に交わる人はなく、冷やかな背中しか向けていなかったような記憶しか残っていません。

わたしの入るゴリラの着ぐるみは、アップショット用とロングショット用の二種類があり、アップショット用は 70 kg を超える重さでそれを着けて動き回することは怪獣どころの話ではなかった。それが“T. I. A”なのである。またこの作品は映画になることを想定して 35 mm フィルムが使用されると聞かされた。

このアップショット用のゴリラの最大の見せ場は、作品の冒頭部分にくるシーンだった。——その日、撮影現場には何台かの消防車が出て来ており放水をしながらのテストシーンが繰り返された。この日の撮影が、その 1 シーンだけのために用意されていたと記憶しているが定かではない。

その監督は、かの Y. 百恵／M. 友和主演の映画を撮ったと自慢されていた日本人の T. K 監督だった。

「よーし、瀬崎ちゃん準備して木に登るよ！」

その日の朝から出張っていたわたしにやっとゴーサインが出されました。着ぐるみを着る何時間も前からメイキャップのニックさんに目の周りをメイキャップしてもらい準備は整っていました。このゴーサインとともに真っ赤なコンタクトレンズを目のなかに装着する。このコンタクトレンズは当時では珍しい色つきの大型のハードレンズで、わたしの眼球そのものがすっぽりと見えなくなった。しかし「三十分以上付けていると目が見えなくなる危険性があります…」と医者から注意を受けていた代物でした。

一番の見せ場と聞いていたシーンで、台本には…ゴリラの毛深い姿がシルエットを描いて、落雷

の中に真っ白に浮かび上がる…みたいなことしか書かれていないのに、いきなり木に登って！！…ちなみにこのゴリラは重さもさることながらわたしの腕の二倍も長いその先にある指は、わたしの握力がマジックハンドに伝わって開いたり閉じたりするのです。

『…監督？それはないですよ！』とは言えない。心の中ではそう叫びながら、必死に木にしがみつこうとしている姿はどんなだったのだろう…？出来上がった映画よりもそっちのほうを見てみたい気がする。

木に登れないことを監督に理解していただけるまでにどれほどの時間があつたのだろう…。

それとも私の記憶がこのときの出来事をそのように変えてしまっているのか？…それはおそらくY. 百恵/M. 友和と“T. I. A”との接点を見つけ出そうと試みたことが原因だろう。

とうとうサナギの中から這い出すように、わたしだけが木に登り、スタッフの手を借りて脱けのゴリラを引き上げ、足場のない木の股でスタントマンよろしく、その身を再び殻からの中に潜り込ませる。

その身の力も気力も使い果し成し遂げたような脱着作業が終わるや否や…

「はい！そこでバナナの房を抱えて食べるシーン…行くよ！」

ジャングルの中で、監督の姿だけしか見えなくなった。

「はい、よろしくお願いします！！」

監督の指示に対し許されている返事はそれしかない。

70 kgを必死に持ち上げ危うい足場の上で格闘的なテストが続いた。

そしていよいよ本番、——雨の中のジャングルで、世界で初めて発見された成長した白いゴリラ“T. I. A”がバナナを食べているようなシーン。待ち構えていた消防車から一斉に放水が始まりストロボ効果の落雷が瞬く。わたしの周りは激しい放水シャワーのため真っ白になってゆく。

…そのとき、カメラが回りだすかすかな音が、張りつめた空気の中に聞こえた気がした。

「はい、本番…3・2・1、 アクション！」わたしは夢中でテスト以上のオーバーアクションをこころがけた。自分では思いっきりやれていたと思っていた…その時だった、

「あっ、駄目だ、雨が赤くなってきちゃった！中止中止！！」

それは監督の言葉ではなくカメラマンの発した言葉でした。

このときの衝撃は今も生々しく記憶に刻まれています。当然監督もこのカメラマンの言葉に

は激怒しました。しかし、このカメラマンも相当にベテランらしく、監督とまともにぶつかりあっても「ここで、雨が赤くなったんじゃー絵にならないんですよ！！」みたいなことで、一歩も引くことはありませんでした。

このシーンは結局それ以上進められず、そしてこのシーンがどうなったのかを後ほど知らされました。

それは、一ヶ月間の撮影が終わり、急きょ撮り直しのシーンがないかのチェックが必要になったとかで、わたしも一緒にニューヨーク行となったのです。

しかし…その撮影されたラッシュの中に、そのシーンは見当たりませんでした。

今思い返せば、この後…もちろん、自分の演技など恥ずかしくて見てはいられない。けど…この作品がアメリカで正月TV番組として放映されただけで（…と、聞いた）とうとう日本にやってこなかったのは、うなずける気もする。

しかしそれも、今となって思い返すことであって…当時の私は、夢の中の出来事も現実の出来事もそのはっきりとした違いすら判断できないような状態で…やはり地に足の届かなかった、幻の出来事だったのであります。